第27回男子ハンドボール世界選手権2021エジプト

試合結果報告

試合日　2021年1月15日

予選ラウンド

ＪＰＮ		ＣＲＯ
17	前半	14
12	後半	15
29	合計	29

No.	ポジション	氏　名	得点
10	LW	杉　岡　尚　樹	
12	GK	岩　下　祐　太	
13	PV	笠　原　謙　哉	
14	CB	北　詰　明　未	
15	LB	部井久アダム勇樹	
18	LB	成　田　幸　平	3
19	RB	徳　田　新　之　介	
20	RB	渡　部　仁	1
21	LW	土井レミイ杏利	1
22	GK	坂　井　幹	
25	RW	元　木　博　紀	4
27	PV	玉　川　裕　康	2
31	LB	吉　野　樹	4
33	CB	東　江　雄　斗	5
36	RW	出　村　直　嗣	
38	CB	水　町　孝　太　郎	3
39	GK	中　村　匠	
40	PV	高　野　颯　太	1
41	RB	徳　田　廉　之　介	5
43	PV	吉　田　守　一	
合　計			29

戦況

別　紙

戦況

世界選手権1戦目。相手はヨーロッパ選手権2020の準優勝国であり、過去、オリンピック金メダル2回、世界選手権でも優勝経験のある強豪国のクロアチア。率いるのは、クロアチア代表を率いて、オリンピック、世界選手権ともに金メダルを獲得している世界の名将の一人、Lino Cervar。全ての選手がドイツ、スペインなど欧州トップリーグでプレー経験があり、Domagoj Duvnjak（THW Kiel所属）、Luka Cindric (FC Barcelona所属）などのスター選手も顔を揃える。

日本はGKに岩下。成田と笠原をセンター、二枚目に渡部と吉野、サイドに元木と土井を配置した「6−ODF」でゲームスタート。攻撃は、プレーメーカーには東江、渡部と吉野がバックコート、元木と土井がウイング、PVに笠原の布陣で臨む。今大会、新ルール適用より、試合毎に毎回16名のベンチ入りメンバーを選べるため、この日のベンチアウトは杉岡、中村、吉田、部井久となった。

立ち上がり、GK岩下の好セーブにより試合が動き出す。日本のミスから逆速攻により失点。対する日本も相手の「５－１DF」に対して、プレーメーカーの東江を中心に効果的なコンビネーションプレーを展開、東江の7mスローで初得点。その後も土井の速攻、東江のカットイン、吉野の連打などで得点を重ねていく。日本のDF陣も成田と笠原を中心に辛抱強く耐え、相手にチャンスを与えない。クロアチアにノーマークシュートの機会を創出されるも、岩下の好セーブで切り抜ける。玉川の速攻で６－２となったところで、クロアチアがタイムアウトを請求。タイムアウト明けも、渡部がポストパスをインターセプトして、成田の速攻に結びつける。対するクロアチアも、ブンデスリーガの Leipzigで活躍中のMarko Mamicのディスタンスシュートや、同じくブンデスリーガ所属で、長くMelsungenでプレーをしているMarino Maricのポストプレーなどで追い上げを図るが、日本は東江のリードから元木のサイド、徳田（廉）のカットイン、水町のクイックスタートでさらにクロアチアを引き離し、22分には１４－８と6点のリードを奪う。前半残り4分、１６－１１の５点リードの場面で日本はタイムアウトを請求。もう一度、攻守の約束事を確認する。その後クロアチアの猛追を受けるも水町のカットインで加点、１７－１４の３点リードで前半を終了する。

ハーフタイムでは、主にDFについての修正点を確認。相手コンビネーションプレーに対して守備についての共通理解を図った。

後半、クロアチアはIvan Cupic（Vardar所属）をライトバックに、Zlatko Horvat（Metalurg所属）をライトウィングに配置し、機動力を使って日本のDF陣を崩しにくる。退場者を出し、流れの悪い時間帯を作ってしまうが、岩下の好セーブもあり、元木のリバウンド、渡部のミドル、徳田（廉）の7mスローなどで、着実に加点していくが、Luka Cindric (FC Barcelona所属)とDomagoj Duvnjak（THW Kiel所属）の巧みなプレーに苦しめらめる時間が続き、後半１５分には２３－２１の２点差に迫られる。ここで、日本はGKに坂井を投入して新しい風を期待する。しかし、クロアチアに傾いた流れは変わらず、後半１８分に２３－２３の同点に追いつかれる。ここで、日本はタイムアウトを請求。タイムアウト後、元木のスキルフルなサイドで勝ち越し。その後は、取っては取られての攻防が続き、残り時間１分半、GK岩下がIvan Cupic（Vardar所属）のサイドを好セーブして、日本のマイボールになった時にタイムアウトを請求。タイムアウト後の大切な攻撃機会の共通理解を図り、吉野のカットインで得点、残り1分で１点のリードを奪う。しかし、終了間際に相手7mスローのチャンスをIvan Cupic（Vardar所属）に決められ、２９－２９の同点でタイムアップ。

優勝候補の一角に大金星とまではいかなかったが、終始日本がクロアチアをリードする形でゲームを運び、欧州の強豪国相手に国際舞台で初の引き分けに持ち込んだと同時に貴重な勝点１を獲得した。また、この試合のPlayer of the MatchAwardには東江雄斗が選ばれた。

新型コロナウィルスの影響により、２０２０年１月のアジア選手権以来、約１年ぶりの国際試合となり、若手の初代表の選手も数名いる中で、最後までメンタル面でも体力面でも互角以上に戦えたことは、これまでのトレーニング（メンタルトレーニング・フィジカルトレーニング含）の積み重ねの成果と言える。予選ラウンドは始まったばかり、次のカタール戦（１７日）に向けて良い準備をして臨みたい。